

## 遷延性・慢性咳嗽患者における血漿サブスタンスP濃度の検討

大塚浩二郎 新美彰男 松本久子 伊藤功朗 山口将史 松岡弘典 陣内牧子 小熊毅  
竹田知史 中治仁志 井上英樹 岩田敏之 田尻智子 三嶋理晃  
京都大学医学部呼吸器内科  
協和メデックス株式会社 KMアッセイセンター 青山典仁 佐々木一彦

【背景・目的】咳嗽のメカニズムにサブスタンスPが関連することが示唆されているが、遷延性・慢性咳嗽患者において血漿サブスタンスP濃度を検討した報告は少ない。今回、遷延性・慢性咳嗽患者の血漿サブスタンスP濃度を測定し、健常人との差および各種臨床所見との関連を検討した。

【対象】3週間以上続く咳嗽を主訴に当科を初診した患者 85名（喘息性咳嗽 [咳喘息+咳優位型喘息] 64名、非喘息性咳嗽 [胃食道逆流症、感染後咳嗽など] 21名）と健常人 18名。

【方法】スパイロメトリー、アストグラフ法による気道過敏性、咳感受性、呼気NO濃度、誘発喀痰細胞分画を測定し、血漿サブスタンスP濃度との相関を検討した。血漿サブスタンスP濃度は血漿分離後、安定化剤を添加し、凍結保存した検体を後日ELISA法で測定した。

【結果】血漿サブスタンスP濃度は喘息性咳嗽群、非喘息性咳嗽群で健常人と比較し有意に高値を示したが、咳嗽患者の2群の間には有意差は認めなかった。血漿サブスタンスP濃度は喘息性咳嗽群においてのみ気道感受性 (Dmin) と相関した ( $r = -0.29, p = 0.03$ )。咳感受性や%FEV<sub>i</sub>などとの相関は認めなかった。

【結語】サブスタンスPの遷延性・慢性咳嗽への関与、喘息性咳嗽においては気道過敏性への関与が示唆された。